

中級日本語教育について

中 村 妙 子

[要 旨]

中級教育に関心が集まり、そのカリキュラム、教材の開発が行なわれている。そこで、この小論は中級日本語教育とは何かを考えるものである。まず、中級とはどのレベルであるのか、共通の理解が必要である。現在では、日本語能力試験の2級を中級と考えるのがわかりやすい。また、中級のスタートラインははっきりしない。教科書は種々あるが、それぞれ異なる。初級と中級をつなぐいわゆる初中級的なもの、初級とのギャップがあっても、使う側での補足を期待しているものなどである。教科書からは一般的な出発点はたどれない。

具体的に国際基督教大学の中級教育についてみると、カリキュラム、教材は完成されてはなく、試用の段階である。ICUの中級は多くの要素を載せなければならない。しかし、これまでの蓄積、現在の日本語教育の成果を活用していけば、難しいことではない。すべてを、教材、カリキュラムに盛り込むのではなく、分からないことを学習者自身が解決する方策を習得させることも必要である。ICUの理念の一翼を担う日本語教育であれば、最適のカリキュラム、教材の確立が急がれる。

[キーワード]

中級教育、中級のスタートライン、日本語能力試験認定基準、中級教材開発

1. はじめに

日本語教育における中級教育に関心が集まっている。小論ではその中級日本語教育とは何かを探るものである。戦後、日本語教育が再開されたころは、市販されている教材の数は少なかった。その時代、まず、初級教材の開発に多くのエネルギーを使ってきたといえるだろう。そして、現在、日本では学習者の増加、教授理論の変化も加わり、200冊に近い初級教材が出版されている。ひるがえって、中級レベルの教材は1980年代半ばから、徐々に出版が始まった。中級学習者の目的の多様性、初級学習者ほど数が多いなどの要因も加わって、中級レベルの教材は少なかった。しかし、現在はかなりの中級教材が出版され、それぞれのクラスに適するものを選択できる環境となってきた。これは初級教材が整備され、中級へと関心とエネルギーが向けられ、そのカリキュラム、教材の整備が問われているからだと考えられる。国際基督教大学においても、その状況は同じである。初級教科書の出版を1996年に行ない、それに続き現在中級教科書の開発が進められて

いるのである。

2. 中級とは

初級、中級という言葉述べてきた。しかし、この言葉の定義が曖昧であり、日本語教育に携わるもののなかに共通の理解があるのか問われていることである。しかしながら、このレベルを規定してみなければ、論は進まない。レベルの基準の一つとして用いられているのが、日本国際教育協会と国際交流基金で行なっている、日本語能力検定試験である。認定基準は以下の通りである。

- 1級 高度の文法・漢字（2000字程度）・語彙（10000程度）を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような総合的な日本語能力（900時間程度学習したレベル）
- 2級 やや高度の文法・漢字（1000字程度）・語彙（6000程度）を習得し、一般的な事柄について、会話ができ、読み書きができる能力（600時間程度学習したレベル）
- 3級 基本的な文法・漢字（300字程度）・語彙（1500程度）を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章を読み書きできる能力（150時間程度学習したレベル）
- 4級 初歩的な文法・漢字（100字程度）・語彙（800程度）を習得し、簡単な会話ができて、平易な文、または短い文章を読み書きできる能力（150時間程度学習したレベル）

この4級、3級を初級とし、2級を中級、1級を上級と考えるのが一般的である。学習時間を各300時間と考えて、レベル分けをするのが、一番理解しやすいが、この300時間で学習した文法、漢字、語彙が各機関及び各教科書で異なりがあることは予測しやすいことである。「日本語能力試験出題基準」に文法、漢字、語彙は各級毎に提示されているが、これも80%の提示であって、使用者の自由度が20%含まれているのであるから、異なりは出てくる。

この状況にあっても、初級については文法、漢字、語彙、機能、場面、話題を加えても共通するものが多い。しかし、中級となると何が中級の教育なのかということは、必ずしも、明確ではない。

3.

1) 中級のスタートライン

一つの機関で継続して学習を進める。あるいは、初級から中級へと続いて出版されている教科書を用いる場合は、学習者のスタートラインは同じであると考えられる。しかし、

日本語教育機関の多くでは、異なる機関で学習した学生を受け入れて授業を行なうことが多い。その場合には、中級のクラスに入っても、スタートラインは異なる。先に、初級で行なわれる教育内容は、共有されているものが多いと述べたが、実際に中級の授業を始めてみると、その既習の日本語力が揃わないことは往々にして起こることである。

このようにレベルが揃わなくても、大きな枠でくくって、中級のクラスを編成し授業を行なっていく。そのさい、行なわれていることは、ばらつきのある学習者に、初級で習得していると考える項目を補足しつつ中級の授業を行なう。あるいは、中級の授業に入る前の何時間かをとり、補足の授業を行なって、スタートラインを揃える機関もある。補うものが文法項目、漢字の不足分であれば、ある意味で簡単であるが、機能、運用の面で補うとなると、最初の授業時間を割いても、補いきれない。これは、中級授業の全課程の中で、補われていくものとなる。あるいは、中級の教育自体がその要素を含んだものなのかもしれない。

また、最初の中級へのスタートライン作りの期間になされることは次のようなことである。復習的な読み物を読む、初級文法項目の復習をする、機関で使用する教科書のために、既習となっている漢字の学習を行なうなどである。話し、聞く能力については、国内で初級を終了した学習者には、日常会話に不便を感じない程度のレベルが期待できる。初級を日本以外で学んだものは、話し、聞く能力はかなり低く、ほとんどない学生も混じっている。そのような学習者に対しても、日本における、日本語にあふれた環境を活かせば、能力のバランスをとることは、さほど難しくはない。

2) 中級教科書のスタートライン

中級教科書を取りあげ、その最初の課を見ることによって、一般的な中級の出発点を見ることが出来る。

(1) 『総合日本語中級』 水谷信子 (1987) 凡人社

[[『総合日本語中級』について] のなかに、次のように述べられている。

レベル：150時間をきちんと学習したもの。An Introduction to Modern Japanes の最初の24課を学習し、動詞の活用や基本的な日本語文法を理解しているもの。

課の構成：本文、会話文、単語のまとめ、文法ノート、文型練習、ディスコース練習、漢字熟語練習、応用読解練習

本文：レッスン1 サラリーマンの勉強会 (約400字)

最近^{さいきん}サラリーマンの間に^{あいだ}「勉強会」がはやっているそうである。「勉強」の内容は「販^{はん}売^{ばい}法^{ほう}の研^{けん}究^{きゅう}会^{かい}」「取^{しゅ}材^{ざい}の裏^{うら}ばなしを聞^きく会^{かい}」「ワイン研究会」「服^{ふく}飾^{しよく}センスをみ^みが^がく^く会^{かい}」など、さまざまであるという。_____

- (2) 『朝日新聞で日本を読む 中・上級日本語読解教材』 伊藤博子他 (1990) くろしお出版

[はじめに] のなかに次のように述べられている。

レベル：中級から上級初期の学習者

課の構成：本文、問題集（単語リスト、読解問題、語・表現問題）

本文：第1章 新オフィス考（約780字）

東京で仕事をする外国人ビジネスマンが、この二、三年で、随分増えた。その人たちに、日本のオフィスはどう映っているのだろうか。三人の外国人ビジネスマンに聞いてみた。_____（生教材）

- (3) 『日本語中級Ⅰ』 国際交流基金 日本語国際センター (1990)

『日本語中級Ⅰ』 のなかに次のように述べられている。

レベル：日本語の初歩段階（約300時間）を学び終えたもの。『日本語初歩』に続くもの。

課の構成：「会話文」、「読解文」、「練習」

会話文：1課 会合への招待（約360字）

山田：リーさん。

リー：はい、何でしょうか。

山田：日本への出発は来月の3日でしたね。

リー：はい。

山田：準備はもうできましたか。

- (4) 『中級からの日本語 読解中心』 池田重監修 (1991) 新典社

[はじめに] のなかに次のように述べられている。

レベル：中級程度の日本語能力をもつものが上級レベルまでの読解の力をつけることを目的としている。

課の構成：本文を読む前に、本文、問題Ⅰ（内容に関するもの）、問題Ⅱ（語法に関するもの）、読みの練習

本文：1課 手の仕事 前田 勝也（約740字）

わたしたちの手は、朝起きてから夜寝るまで、様々な仕事をしています。ゆっくり休んでいる時がないくらいです。手は、一体どんな仕事をしているのでしょうか。_____（生教材 漢字学習を目的にしている）
ないので漢字には総ルビ付き）

(5) 『文化中級日本語Ⅰ』 文化外国語専門学校編（１９９４）凡人社

[この本の使用にあたって] のなかに次のように述べられている。

レベル：初級段階（約３５０時間）終了したもの。『文化初級』に続く教科書。

日本の大学や専門学校に進学を希望するもの。

課の構成：動機づけ、本文、文型、表現・語句、練習、技能、接続詞と副詞

本文：１ 学習方法アンケート（約４００字）

あなたの日本語の勉強のしかたにあてはまるものにレをつけてください。

- ☐ １．単語帳を作ったり、何回も書いたりして単語を覚える。
- ☐ ２．単語を覚える時、関係のある言葉や反対の意味の言葉を一緒に覚えるようにしている。

(6) 『中級から上級への日本語』 鎌田修他（１９９８）The Japan Times

[この本をお使いになる方に] のなかに次のように述べられている。

レベル：中級レベルの日本語学習者。その能力を上級レベルに引き上げることを目標とする。また、「中級」「上級」については次の定義が述べられている。

「中級」はパターン化した日常の言語活動を、文レベルの発話で表現、理解できるが、談話レベルの理解や表現はできず、パターンからはずれた場面での複雑なコミュニケーションには困難をきたす。

「上級」はパターンからはずれた場面での複雑なコミュニケーションができる。つまり、予期していない場面に遭遇した結果、必要となる「説明・理由づけ」「記述」「報告」など、談話レベルの言語活動を理解、表現できる。（p. i v）

課の構成：読む前に、読んでみよう、読んだあとで、重要表現 文法・語彙練習

読んでみよう：ユニット１ ヒトと味違う自己紹介の仕方（約１８５０字）

ここに述べる自己紹介とは、何かの会合や集会で、参会者に自分をしってもらうためのものです。ですから、従来のような通りいっぺんの紋切り型では、自分を印象づけることはできません。_____（生教材『心と人を動かす話し方』江川ひろし監修）

これらの教材を見ても、中級のスタートラインはなかなか見えてこない。というよりも教材により、初級と中級の間のいわゆる初中級を視野においたもの、中級から上級を目指したもの、初級と中級との間にギャップのあるものなどが混在しているからであろう。どの教材を使っても、中級レベルの授業はそれぞれの学習者によって、副教材を入れていか

なければならないことが見えてくる。

一般的な中級の問題点は分かるが、各機関がその中級教育をどう組み立てていくのかを考えることが、現実的であり、その姿を描きやすく思われる。そのため、次に国際基督教大学（ICU）の中級教育を考えてみる。

4. ICUの中級教育

国際基督教大学の中級教育とはどのような姿なのだろうか。1996年11月にまとめた「国際基督教大学日本語教育プログラム 初級・中級Ⅰ・中級Ⅱ・上級クラスシラバス」によると中級クラスの姿は次のような目標、内容を持ったものとなる。

中級Ⅰ〔目標〕

複雑な状況に対処できる。説明したり、受けたり、意見を述べたりできる。様々なメディアを通して得る情報のうち事実に基づいたり事項について骨子がわかる。一般的な事柄の説明がかなりわかる。聞いたり読んだりしたものの感想を書いたりまとめることができる。

中級Ⅱ〔目標〕

叙述したり意見を述べたりできる。討論にも少し参加できる。困難な状況も処理できる。やや専門的な叙述や説明がわかる。公的な場面での書き方、話し方ができる（フォーマルな手紙、話し合いの要点、スピーチの原稿など）。具体的な事柄の報道の要点がわかる。

4技能についてそれぞれ詳細な目標、教授項目が述べられ大枠で認められている。それぞれの技能において、養成しなければならない技能、項目がある。具体的にはシラバス表を参照されたい。しかし、シラバスの中の「場面／話題」の項目をみると、内容の推測が付くものが多いのでそれらを以下に記す。

話し方シラバス

中級Ⅰ

電話、感情、病気／健康、身体の調子、人の性質／能力／態度、操作方法、物や人の外見、道順、行き方

中級Ⅱ

事故、盗難、紛失などの非日常的出来事、身近な社会問題、教育、文化、（習慣、行事、価値、行動様式、事情）身近な環境問題（ゴミ問題など）

聞き方シラバス

中級Ⅰ

多種・多様な指示・説明、個人の背景（基本的、個人的情報）、個人的関心事・活動
必要な状況・事柄、社会的しきたり、多様な話題、礼儀・社会的状況

中級Ⅱ

ニュース教材、ドラマ教材、日常的でより高度なもの、やや専門的で、なじみのあるトピック

読み方シラバス

中級Ⅰ、Ⅱ

ジャンル：説明文、意見文、随筆、物語文、各種書式；新聞・雑誌記事、グラビア記事、インタビュー記事、短篇小説、詩、俳句、ノンフィクション、専門書などの論文系統のなかから容易なもの、時刻表、ガイドマップ、スーパーのラベル、電気機器の使用書、コンピュータの画面、広告、図、グラフ、表

書き方シラバス

中級Ⅰ

時事問題、教育、文化、習慣、政治、経済、歴史、環境問題、本、映画などの感想、日常生活で気付いた事、相談

中級Ⅱ

時事問題、教育、文化、習慣、政治、経済、歴史、環境問題

中級Ⅰ漢字：読み書き１５０字、読みのみ１５０字 計３００字

中級Ⅱ漢字：読み書き１５０字、読みのみ１５０字 計３００字

上級の達成目標は、日本語でなされる大学の講義を受講し、大学を卒業できうる日本語能力に近いものであり、アカデミックなものである。上級教育に使える時間数とシラバスと初級で使う時間数とシラバスを引くと中級に使える時間数とシラバスとなる。ICUにおける初級の総時間数３００時間。中級の総時間数は３００時間。上級の総時間数は１５０時間である。この時間数にはテストに要する時間も含まれている。日本語能力試験の１級が９００時間をうたっているのに比べ時間数が少ないことは明らかである。また、初級のしっかりとした基礎の上に、中級、上級、でかなりの日本語能力を付けなければならないことも明確である。

中級３００時間に学ぶ、運用を考えた意味・機能文型は４５０から３５０と１９９８年に発足した中級日本語教科書班で算出している。それに連なる中級で期待される５０００近い語彙、６００漢字、先に述べた、話題、機能を含み、四つの技能を伸ばしていく。中級に乘せられている要素は多い。

４．

１) 中級教材

日本語中級教育で学ぶものをどのように教材化し、教室活動としていくかが次のステッ

プである。ICUの中級教材、教科書は1994年から開発の始動を始めた。いまだ、定形になったものを、えられていないが早い機会にまとめられることが期待される。一つの機関で、多数の人数で行なう日本語教育であるから、統一性、均一性、効率性、利便性が必要である。それは社会的評価につながっていく。そのためにはまとまった、全員が使う教科書が必要である。

教材は教室活動と連携するものであるが、現在考えられている形は、先に述べた中級の文型を「話し方」と「書き方」のなかに入れる。そのための、各レベルでの機能、話題の振り分け、設定が重要なポイントとなり、機関での合意を見つけなければならない。また、「読み方」は従来の読みの中で中級文型を学ぶというものよりは、読みは学生の知的興味を喚起するもの、話題となり話し合いへ広がるもの、心情に触れるものとして位置付けられる。この読みの題材についても、どのような話題をどのようなコンセプトで設定していくのか、合意をはからなければならない。いまひとつ、文型を「読み方」から離すとき、学習者が一日の中で語彙、漢字、文型、機能、運用と各技能別に種々のものを学ぶことの負担を考慮しなければならない。

また、中級の出発点である日本語4のレベルでは、初級からの移行を考えて、その教材はギャップを少なくし、文型などを初級の提示の仕方と似たものとし、漸次中級型へとなっていく。また、読みの教材も文型を押さえながらの、書きおろし教材が考えられる。

中級教科書の設定を提案しているが、学習者の年度による異なり、時事的内容のものを扱うために、すべてを固定するのではなく、カリキュラムの9割の教材を整備し、1割の自由裁量を残すものとする。

2) 中級カリキュラム、教室活動

中級カリキュラムは中級前期は「話す・聞く」と「読む・書く」が同じ重みとなり、時間数、単位数が同じである。中級後期は「読む・書く」に比重がかかり3分の2の時間数と単位数となり、上級への橋渡しを目指していく。

教室活動、教授法は初級がCommunicative Language Teachingを目指しているのだから、中級もその形になっていくのが自然であろう。そのためのカリキュラム、教室活動を中級レベルでどのように実現するのか、考えるに足る課題である。また、これは上級へと繋がっていくものとする。

5. 学 習 者

ここまで、中級教育の有りようを述べてきた。ここで、ICUの学習者がどのようなものであるのかを少し触れてみたい。現在、学習している留学生の9割までは、1年日本へ留学する1年本科生で交換留学生である。4年間ICUで学び、卒業していく学生は非常に少ない。しかし、この機関が目指しているのは、日本の大学で学び得る日本語能力であ

る。たとえ、日本の大学を卒業するのでなくても、学んだレベルをつなぎ合わせれば、あるいは、そのレベルの日本語が必要になった時に、使える日本語を目指している。

学習者の声をまとめるには、少ないのだが、1999学年度秋学期に集中日本語教育2で学んだ学生の学年末のアンケートを見てみたい。このコースは中級前期となる。学生7名中5名の回答である。

「このコースを取ってから、あなたの日本語がどのくらいのびたと思いますか。」

この質問に対しては、少しはのびた。読み書きがのびたが、話すことはのびていないというものが多かった。

「コース全体のコメント」

これについては、むずかしい。いいとおもうが、もっと日常会話を。沢山のことをしたけれども pointless、授業の始まりが早すぎるなどである。

その他各授業活動について

漢字のクラスは自分で勉強できる。構文は英語の説明がほしい。作文はよかった。

速読はむずかしかった。

概ね評価するものの、むずかしい。話すことに自信がない。朝早い時間帯はつらい等というのが読み取れる。数は少ないが、一つのクラスの学習者の感じたことである。

学習者が学ぶ意欲を持たなければ、クラスは成立しないが、これは学生を引き付ける内容を提供しているかどうかということとの相関関係であるのかもしれない。

6. ま と め

学生の声の中に出てきたのだが、教員の固有名詞が出て、その教員が良い教師であることを述べている。学生の評価には必ずといってよいほど良い教師、問題の教師の名前が出てくる。一つの文化なのかもしれない。いずれにしても、教材、カリキュラムが揃っても、良い教師がいなければ、どのレベルでも教育はできない。教師論はこの紀要にも載せられたので参照されたい。良い教師は中級教育においても不可欠な要素である。

また、ICUの上級達成までの総時間数は多くない。学習者もすべてを教室で与えられることを望んではいない。自主的な活動は重要な要素である。これらのことを踏まえると、学習者には分からないことがある場合には、どうすれば自分で調べ、解決することができるかを、早い段階から指導していくことが有効だと考えられる。そのことにより不足するものは補われていくであろうし、将来とも日本語の海の中で、自分に必要な言葉を習得していくために有用なことである。

日本語中級教育について考えてきた。ICUの中級教育としては教科書をまとめなければならない。中級教科書の試用版がなかった時代に、ICUで使った、様々な教科書、あるいは現在市販されている教科書を見ても、そんなに違いは見えてこない。望んでいる中

級教科書がとくに変わった形で出てくるとも思えない。長年行なってきた I C U の中級教育がそんなに的外れだったとも思えない。この機関は少しずつ、その時代のなかでの最良の教育方法を取り入れてきたはずだ。

中級教材作成への合意には各人の思い入れや各人の考え方で、激しい議論や検討も必要だろう。しかし、この機関が目指しているのは、I C U の理念の一翼を担って、その国際性に寄与し、世界で活躍できる人材を輩出することにあることを考える時、最適の日本語教育を行なえる中級教育の確立のための教材開発が一日も早いことが望まれる。

参考文献

- 国際交流基金 日本国際教育協会（１９９９）『日本語能力試験 出題基準』凡人社
国際日本語普及協会（１９９８）「中級を理解する」『A J A L T No. 21』
砂川有里子他（１９９８）『日本語文型辞典』くろしお出版
日本語教育学会（１９９５）『日本語教育の概観』
村野 良子（１９９２）「学生によるコース評価－教師・その他－」国際基督教大学日本語教育研究センター

参考資料

- 池田重監修（１９９１）『中級からの日本語－読解中心－』新典社
伊藤博子他（１９９０）『朝日新聞で日本を読む－中・上級日本語読解教材－』くろしお出版
鎌田修他（１９９８）『中級から上級への日本語－生きた教材で学ぶ－』The Japan Times
国際交流基金 日本語国際センター（１９９７）『日本語中級Ⅰ』凡人社
文化外国語専門学校編（１９９９）『文化中級Ⅰ』凡人社
水谷 信子（１９８７）『総合 日本語中級』凡人社